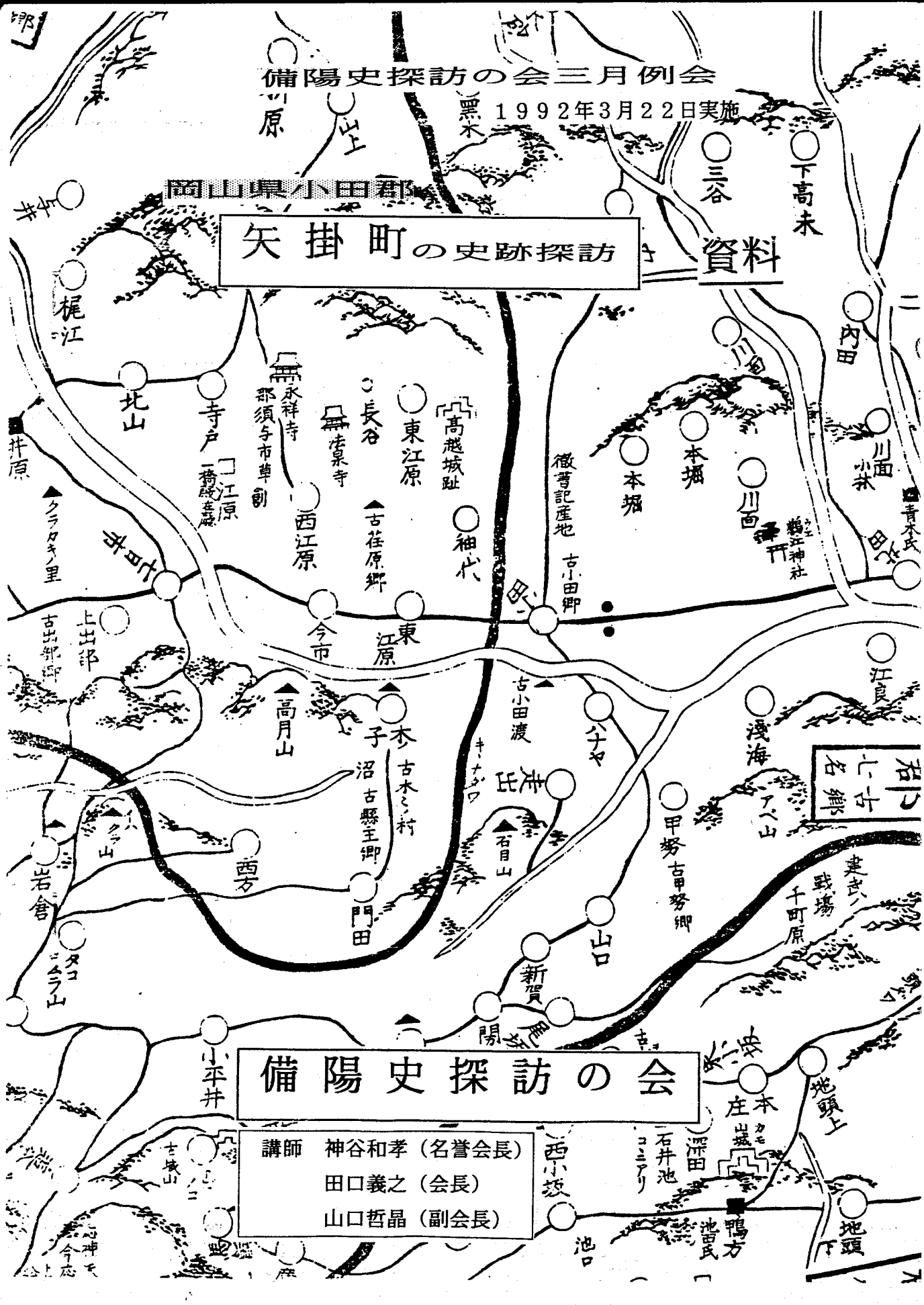


備陽史探訪の会三月例会

1992年3月22日実施

矢掛町の史跡探訪

資料



備陽史探訪の会

講師 神谷和孝 (名誉会長)
 田口義之 (会長)
 山口哲晶 (副会長)

西小坂

本庄

地頭上

地頭下

深田

石井池

コニヤリ

鴨方

池口

山口

新賀

關

池口

池口

新賀

關

池口

池口

池口

新賀

關

池口

池口

池口

新賀

關

池口

池口

池口

新賀

關

池口

池口

池口

新賀

關

池口

池口

池口

新賀

關

池口

池口

池口

新賀

關

池口

池口

池口

新賀

關

池口

池口

池口

新賀

關

池口

池口

池口

新賀

關

池口

池口

池口

目次

矢掛本陣石井家	(1)
茶臼山城跡	(3)
吉備真備公園	(5)
下道氏の墓	(5)
銅壺(下道罔勝母の骨蔵器)	(6)
福武家住宅	(7)
大通寺庭園	(7)
小迫大塚古墳	(8)
橋本荒神塚古墳	(9)

スケジュール

8時45分福山発	9時45分矢掛本陣(10時45分発)
11時茶臼山城跡(12時発)	12時15分吉備真備公園(昼食)
13時5分下道氏墓(13時15分発)	13時半小迫大塚古墳(14時15分)
14時45分橋本荒神塚古墳(15時15分発)	
15時30分大通寺(16時発)	17時福山着解散

備陽史探訪の会事務局

〒720 福山市多治米町5-19-8

☎(0849) 53-6157

国指定重要文化財（建造物）

旧矢掛本陣石井家住宅 11棟

主屋・座敷・御成門・裏門・内倉・西倉・
米倉・酒倉・紋り場・麹場・中門・隠居所
番所・洗場・風呂場・鎮守社・家相図一枚
宅地 316,398㎡

昭和44年6月20日指定

昭和58年6月2日追加指定

所在地 矢掛町矢掛3079

所有者 石井祥一郎



石井家は江戸時代初期頃からこの地に居を構え、中期以後は、代々庄屋を務めるとともに本陣職を務めた旧家で、元禄頃からは酒造業を営んでいた。

屋敷は旧山陽道に面し、間口約20間(36.4m)、敷地面積約959坪(3164㎡)で、本陣関係、主屋関係、酒造関係に区別され、この町第一の規模である。

本陣は御成門を設け、座敷は上段の形式をとり、武家屋敷としての書院造りに町家の趣きを取り入れ、その時代の建築としては威儀正しい構えである。

主屋関係は間取りは複雑で、中側を通り土間として、片側に部屋を配している。

酒造関係は米倉、酒倉、紋り場、麹屋と並び、造り酒屋の雰囲気をとどめている。

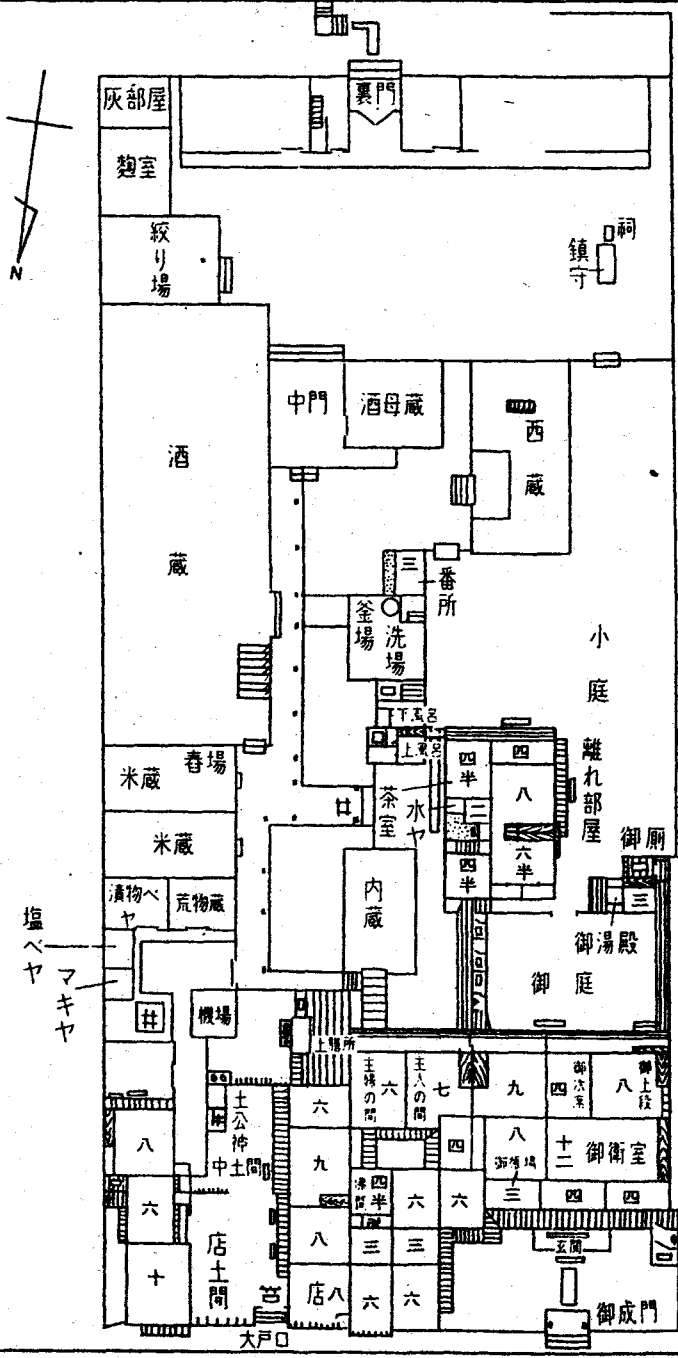
裏門は長屋門の形式をとり、安永3年(1706)、備中西江原藩森家の陣屋を移築したものである。

現在の建物は、江戸時代中期から明治時代初期にかけて建替えられたものである。

石井家住宅は規模が大きく、建築の質も優れ、附属屋に至るまでよく保存されており、主要街道の本陣としては類例もきわめて少なく、価値が高く貴重なものである。

旧矢掛本陣石井家住宅平面図
(矢掛町教育委員会作成)

小田川土堤道路



〔注〕 明治十七年夏佐伯貞斎測量、同二十一年九月鳥越義静訂正・作図による図面（巻軸、石井家所蔵）を筆写したもの。原図は、曲尺六尺五寸を一間とし、縮尺六〇分の一（二間を一寸に縮少）で画かれている。

旧山陽道

茶臼山城跡 (矢掛町東三成)

毛利元就の4男元清は、天正3年(1575)備中三村氏の滅亡後、庄氏の旧城だった猿掛城に入り、庄氏の遺跡を継承し、在名を取って「穂田」(ほいだ)氏を名乗った。しかし、元清は、天正10年(1582)の備中高松合戦が終わり、世の中が平穏になって来ると、高峻な山城である猿掛城を嫌い東三成に新に新城を築いた、これが別名中山城と呼ばれた茶臼山城である

茶臼山城は、山陽道に面した標高114メートルの低丘陵上に築かれた山城で、山上部だけでなく、南麓にも「土居」を始め、樹型、内堀などの諸施設を整備し、城郭史の中で戦国山城から近世の平山城に移る過渡期の山城として注目すべき山城の一つである。

(史料) 毛利輝元知行充行状

備中猿懸要害事預進之候 就夫於彼国五千貫之地事進置候 全御知行肝要候 猶福原出羽守・口羽下野守申候 乃一行如件

天正三年一二月一八日

右馬頭輝元(花押)

四郎殿(毛利元清)

(史料2)在所注文「一所七〇〇貫草壁村、一所三五〇貫山田領家分
一所三五〇貫同所地頭分、一所三五〇貫東三成、一所三五〇貫西三成
一所一五〇貫宇那江村、一所二〇〇貫江良村、一所七五貫中島村
一所二〇貫水砂村、一所七〇〇貫二万郷、一所二〇〇貫本堀村、
一所二〇〇貫小林村、一所一八貫大蔵村、一所四五貫連島、一所三〇〇貫
妹村、一所一〇〇〇貫八田庄 以上 天正三年一二月18日(連判)」

(史料3) 毛利輝元書状

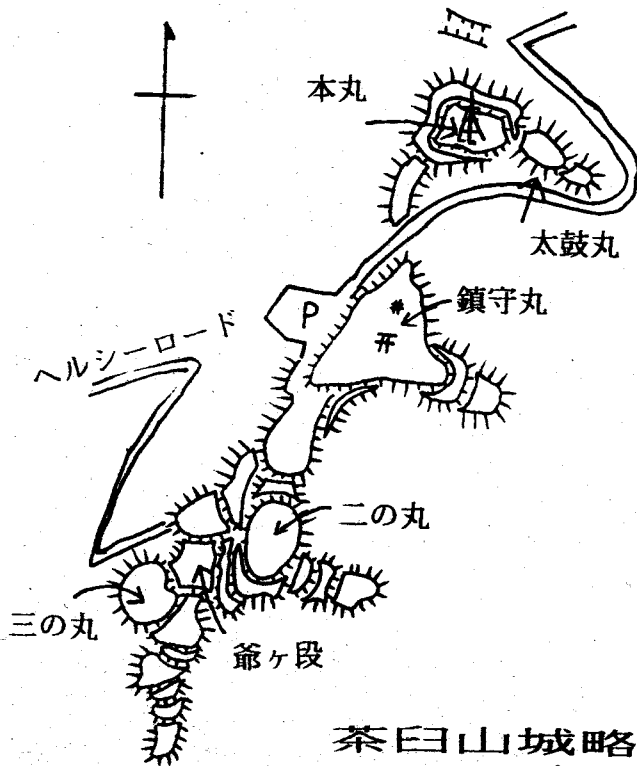
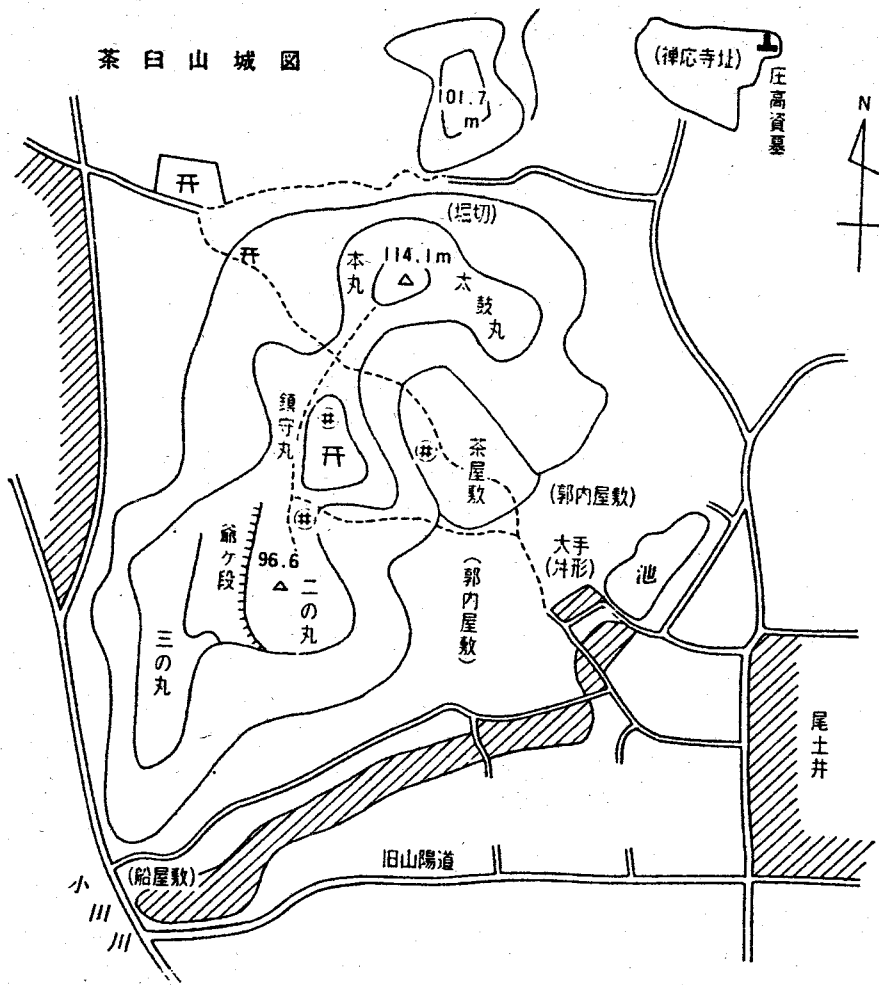
就今度猿懸城替普請、御上国教日御逗留御苦勞之故、頓相調之由元清申越候 誠御入魂之至畏入候、尚使者任口上候之間不能一二候、恐謹言

(天正三カ)五月二日 右馬頭輝元(花押)

湯浅治部太輔殿

(萩藩閩閩録より)

茶臼山城図



茶臼山城略測図

町指定重要文化財(史跡)

吉備公ゆかりの地

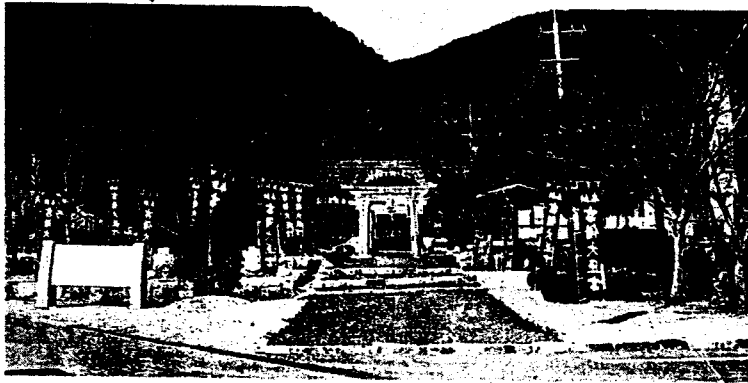
昭和48年4月11日指定

所在地 矢掛町東三成3868 他

管理者 吉備保光会

東三成藤之棚瓦谷に、屋敷跡とみられる土塁に囲まれた「だんのうち」と呼ばれる平地があり、このあたりから奈良時代と推定される瓦片が出土している。

ここは、吉備公館址と称され、下道氏の館があったと伝えられているが、ここに下道氏



墓所を祀る寺院があったとする瓦谷廃寺跡説もある。

現在、吉備大臣宮として祭祀されている。

国指定重要文化財(史跡)

下道氏の墓

大正12年3月7日指定

所在地 矢掛町東三成3803-4 他

管理者 矢掛町



元禄12年(1699)に東三成地内の丘陵地から吉備真備公の祖母を火葬にした銅製骨蔵器が発見され、この地が下道氏の墳墓であることが判明した。

その後、この墳墓から墓誌破片、納骨器、祭器等が発掘された。

火葬を採用してから、一定の敷地を定めて一族の人々を埋葬する今日の墓地形式が、奈良時代前期から始まったことを示す貴重なものである。

国指定重要文化財（工芸考古）

銅 壺 1口

昭和31年6月28日指定

所在地 矢掛町東三成1344

所有者 團勝寺



銅壺は、身の口径21cm、高さ15.8cm、厚み0.6cm、重さ4.96kg。蓋の径24.7cm、高さ8.8cm、厚み0.6cm、重さ2.675kg。

元禄12年(1699)、東三成地内の丘陵地(現、下道氏の墓)から発掘された。

銅壺の蓋の外圈に、「以和銅元年歳次戊申十一月廿七日己酉成」、内圈に、「銘下道團勝弟
團依朝臣右二人母夫人之骨藏器故知後人明不可移破」と刻んである。

この銘文により、吉備真備の父である下道團勝の母を火葬にして埋葬したものであることが判明した。

吉備真備の祖母を火葬にしたのは、日本において、火葬が始まってから間もなくのことであり、当時の下道氏の勢力を示すとともに、当時の火葬による埋葬の仕方を知ることのできる貴重なものである。

町指定重要文化財(建造物)

福武家住宅 3棟

主屋、長屋門、湯殿及び廟

昭和63年9月19日指定

所在地 矢掛町横谷1319

所有者 福武豊郎



大庄屋の遺構として、広さ4、500㎡の敷地面積をもつ豪壮な屋敷である。

福武家は、戦国時代、毛利の武将対馬守元重を祖とし、天保年間(1830～1844)に大庄屋になり、世襲した旧家である。

主屋の建築年代は、正保年間(1644～1648)もしくは、元禄年間(1688～1704)といわれ、安政年間(1854～1860)に、茅葺きから瓦葺きに葺き替えられたと伝えられている。

備中地区の大庄屋の中では最上級の屋敷構えと建築物で、内部間取りは「五間流れ」で、上段の間が設けられており、前・中・奥の三つの土間も珍しい。

長屋門は、天保年間の建築で、木組・白壁・下見板張などが格調高く、県下でも最高級のものである。

町指定重要文化財(名勝)

大通寺庭園

昭和53年11月30日指定

所在地 矢掛町小林1815

所有者 大通寺



約2,000㎡の石組中心の池泉観賞式庭園。

第19世鉄春時代、矢掛住の中西源兵衛が寛政5年(1793)から文化10年(1813)にかけて築庭した庭園で、本堂、書院裏に南面し、高峰山を背景にし、三尊須弥山石組を中心に集団石組を構成し、力強い景観となり、全体として絵画的意匠

匠で、大きな躍動感があり、江戸時代庭園としての風格を備えている。

☆ 毎戸遺跡 (小田郡矢掛町大字浅海字毎戸)

- ① 矢掛町の西約3Kmにあり、遺跡の南側を旧山陽道が東西にはしる
- ② 堀立柱建物三棟のほかに、溝、柱穴列、土壌等が検出される
- ③ 土師器・須恵器・軒丸瓦・円面硯・鉄釘などが出土
土壌Ⅱの付近から外底部に『馬』の線刻がある土師器盤が出土
- ④ 厩を付属施設とする、山陽道の〔駅家〕である可能性が色濃い
- ⑤ 奈良時代～平安時代が中心

☆ 毎戸塚古墳 (小田郡矢掛町大字浅海字毎戸)

- ① 山陽道の北側にある径約30mの円墳で埴輪が存在している

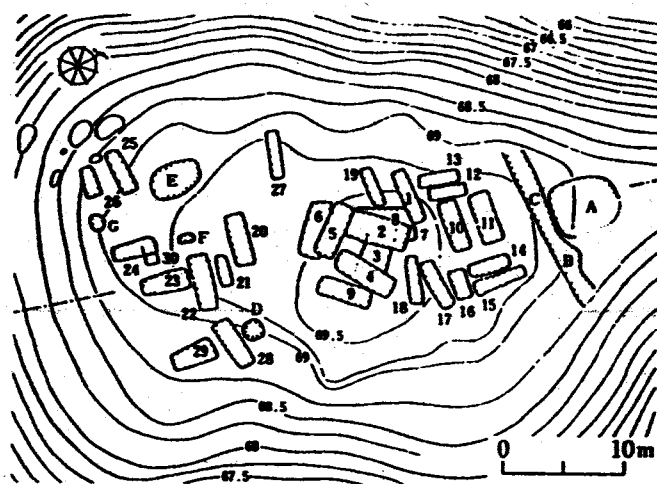
□ 橋本15号墳〔荒神塚古墳〕 (小田郡矢掛町里山田)

- ① 径15mの円墳
- ② 両袖式の横穴式石室(石室全長7.5m・玄室長5.96m・幅1.8~2m・高さ2.4m)
- ③ 岡山県でも数例しかない『石櫛』を持つ



☆芋岡山遺跡 (小田郡矢掛町白江)

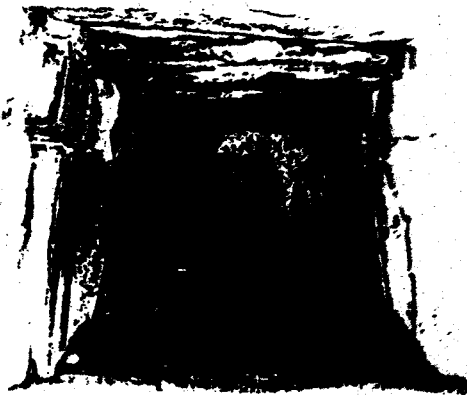
- ①墳丘の築成はなく、自然の高みを利用しただけで溝によるわずかな区画施設を一部持つだけの弥生時代後期の墓地
- ②標高70m・比高50mの小丘頂部に位置し30基の墓墳と灰・炭・礫・土器を含む隅丸方形のピット・溝が検出される
- ③墓墳は北・中央・南の各群に分かれ、中央群は墓墳が大きくこの一角にのみ特殊壺・特殊器台を伴う。南群はピットより特殊器台の祖形を検出



芋岡山遺跡の土墳墓の配置

□小迫大塚古墳 (小田郡矢掛町南山田)

- ①一辺22~27mの方墳、二段築成で幅7~8mの周溝を残す
- ②兩袖式の横穴式石室で全長10.6m、玄室長6.45m・幅2.5m・高さ2.3m
羨道長4.15m・幅1.97m
- ③後期としては最大の方墳で石材は整美な積み方



< 江戸時代の交通路 >

陸路と海路

- 五街道(その延長も含む)
- 五街道付属の街道
- 主要都府(藩街道)
- 三都
- 主要城下町・藩庁
- ⊥ 関所
- 港町
- 主要運糧地

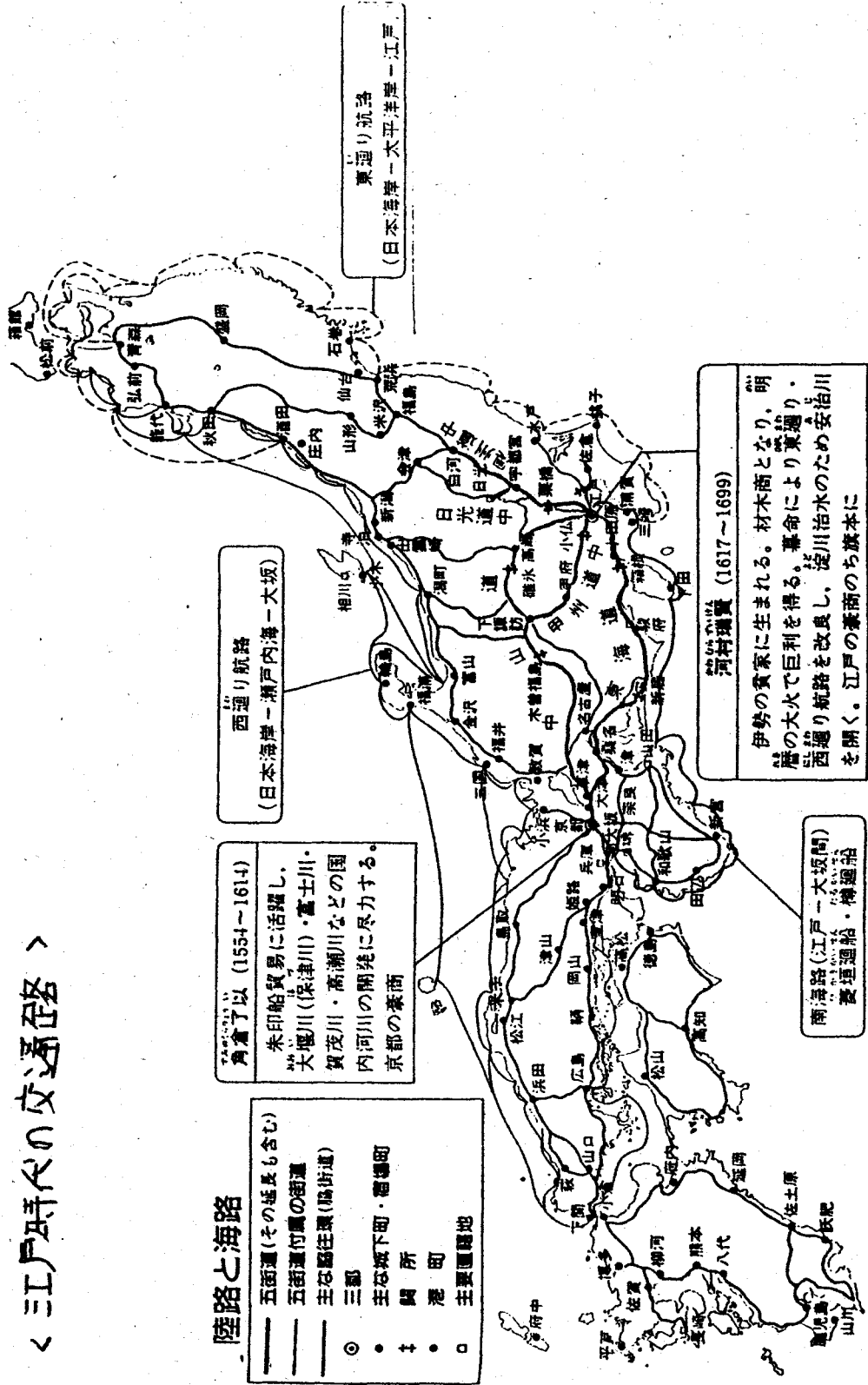
角倉了以 (1554~1614)
 朱印船貿易に活躍し、大堀川(深津川)・富士川・賀茂川・高瀬川などの国内河川の開発に尽力する。京都の豪商

西通り航路
 (日本海岸-瀬戸内海-大坂)

東通り航路
 (日本海岸-太平洋-江戸)

河村理賢 (1617~1699)
 伊勢の豪家に生まれる。材木商となり、明暦の大火で巨利を得る。革命により東通り・西通り航路を改良し、淀川治水のため安治川を開く。江戸の豪商のち幕本に

南海路(江戸-大坂間)
 豪理廻船・樽廻船



代		時		代		時		代	
明		治		文		化		江	
明		治		文		化		江	
				(元)		戸		文	
				文		化		文	
一六三五	寛永	十二	幕府は武家諸法度寛永令を制定し、参勤交代の制度を定める	三	西三成の矢掛陣屋が幕府から庭瀬藩に引き渡される(矢掛などが天領から庭瀬藩領となったため)	九〇	江良の貴布禰神社が建立される	九一	西川面の蓮華寺が建立される
三七	元禄	二	このころ、石井家が矢掛宿の本陣に指定されたという	四	この年矢掛宿では街道の北側に九五軒、南側に一〇二軒の家が立ち並ぶ(矢掛町絵図)	八九	江良の貴布禰神社が建立される	九二	西川面の蓮華寺が建立される
四二	天和	三	江良の若宮神社が川面鶴江神社の分社として創建される	三	庭瀬藩主板倉勝全が村々を巡視し、東三成土井山で猪狩りをする	八〇	西三成の矢掛陣屋が新築落成する(倉敷代官の出張時の住居となる)	九三	西川面の蓮華寺が建立される
四六	正保	三	このころ、東川面の妙覚寺(現四王寺)が備弘雅により中興開基される	三	庭瀬藩の矢掛・義倉が西三成の矢掛陣屋前に建てられる	七七	夏日照のため溝池水論が起る	九七	庭瀬藩の矢掛・義倉が西三成の矢掛陣屋前に建てられる
四八	慶安	元	夏日照のため溝池水論が起る	三	宇佐八幡宮への最後の奉幣使が矢掛宿を進行する	七三	矢掛の専教寺が備順永により創建される	一八三〇	庭瀬藩の矢掛・義倉が西三成の矢掛陣屋前に建てられる
六二	寛文	二	水谷左京亮検地がすべての矢掛地方の村で実施される	三	徳川慶喜が大政奉還し江戸幕府が滅亡する	六二	西三成の矢掛陣屋が新築落成する(倉敷代官の出張時の住居となる)	一八三〇	庭瀬藩の矢掛・義倉が西三成の矢掛陣屋前に建てられる
七三	延宝	五	東三成行部の八幡宮の梵鐘(町指定の文化財)が鋳造される	三	五ヶ条の御誓文を宣布する	六二	西三成の矢掛陣屋が新築落成する(倉敷代官の出張時の住居となる)	一八三〇	庭瀬藩の矢掛・義倉が西三成の矢掛陣屋前に建てられる
七七	天明	八	小田川高瀬舟の船株が幕府代官によって定められる	三	五種の高札が小林村などの各村々の高札場に標示される	六二	西三成の矢掛陣屋が新築落成する(倉敷代官の出張時の住居となる)	一八三〇	庭瀬藩の矢掛・義倉が西三成の矢掛陣屋前に建てられる
八〇	天保	三	小田川高瀬舟の船株が幕府代官によって定められる	三	浅海・奥山田など旧一橋藩領の村々は倉敷県に編成される	六二	西三成の矢掛陣屋が新築落成する(倉敷代官の出張時の住居となる)	一八三〇	庭瀬藩の矢掛・義倉が西三成の矢掛陣屋前に建てられる
八三	元禄	三	矢掛陣屋が倉敷代官所に代わって備中天領の代官の本拠となる(一六八六年まで)	三	矢掛に郵便取扱所が開設される	六二	西三成の矢掛陣屋が新築落成する(倉敷代官の出張時の住居となる)	一八三〇	庭瀬藩の矢掛・義倉が西三成の矢掛陣屋前に建てられる
八八	天明	三	倉敷が庭瀬藩主久世氏領となったため	三	鹿野藩領が断行され矢掛村・小田村など板倉家庭瀬藩領の村々は庭瀬県となる(七月)	六二	西三成の矢掛陣屋が新築落成する(倉敷代官の出張時の住居となる)	一八三〇	庭瀬藩の矢掛・義倉が西三成の矢掛陣屋前に建てられる
八〇	天明	三	倉敷が庭瀬藩主久世氏領となったため	三	倉敷県・庭瀬県が廃止され、矢掛地方の村がすべて深津県に入る(十一月)	六二	西三成の矢掛陣屋が新築落成する(倉敷代官の出張時の住居となる)	一八三〇	庭瀬藩の矢掛・義倉が西三成の矢掛陣屋前に建てられる
八〇	天明	三	倉敷が庭瀬藩主久世氏領となったため	三	深津県が廃止され、小田県が置かれ、矢掛地方の村がすべてこれに属す	六二	西三成の矢掛陣屋が新築落成する(倉敷代官の出張時の住居となる)	一八三〇	庭瀬藩の矢掛・義倉が西三成の矢掛陣屋前に建てられる
八〇	天明	三	倉敷が庭瀬藩主久世氏領となったため	三	小田に郵便取扱所が開設される	六二	西三成の矢掛陣屋が新築落成する(倉敷代官の出張時の住居となる)	一八三〇	庭瀬藩の矢掛・義倉が西三成の矢掛陣屋前に建てられる
八〇	天明	三	倉敷が庭瀬藩主久世氏領となったため	三	小田県が岡山県に合併され、矢掛地方が岡山県となる	六二	西三成の矢掛陣屋が新築落成する(倉敷代官の出張時の住居となる)	一八三〇	庭瀬藩の矢掛・義倉が西三成の矢掛陣屋前に建てられる
八〇	天明	三	倉敷が庭瀬藩主久世氏領となったため	三	地租改正が小田郡で始まる	六二	西三成の矢掛陣屋が新築落成する(倉敷代官の出張時の住居となる)	一八三〇	庭瀬藩の矢掛・義倉が西三成の矢掛陣屋前に建てられる
八〇	天明	三	倉敷が庭瀬藩主久世氏領となったため	三	矢掛の旧山陽道の道端に電信柱が初めて立てられる	六二	西三成の矢掛陣屋が新築落成する(倉敷代官の出張時の住居となる)	一八三〇	庭瀬藩の矢掛・義倉が西三成の矢掛陣屋前に建てられる
八〇	天明	三	倉敷が庭瀬藩主久世氏領となったため	三	江良の西方院出身の勤王僧良基が高野山で没す	六二	西三成の矢掛陣屋が新築落成する(倉敷代官の出張時の住居となる)	一八三〇	庭瀬藩の矢掛・義倉が西三成の矢掛陣屋前に建てられる

安土桃山時代

戦国時代

桃山文化

(東山文化)

二〇	一五	〇三	二	一六〇〇	九七	九九	九五	八七	八四	八三	八二	七五	七四	七三	七一	六九	六五	六三	五八	五三	二二	二	元	七	三	三三	一五〇四	一四六七		
元和	元	八	七	五	四	二	慶長	文祿	十二	十一	十	三	二	天正	元龜	永祿	元	元	永祿	二十	二十	元	元	元	元	天文	永正	文明	応仁	
六	元	八	七	五	四	二	慶長	文祿	十二	十一	十	三	二	天正	元龜	永祿	元	元	永祿	二十	二十	元	元	元	元	元	元	元	元	元
<p>雪舟が遣明船に便乗して中国に渡る このころ、東三成の禪澤寺の仏画、絹本着色地藏菩薩像図がかかれる 備前長船の刀工が横谷の井谷で鍛刀する(草壁打) 引き続いて長船の刀工が横谷で鍛刀する (この刀は徳川家康の愛刀となり、現在日光東照宮に秘蔵されている) 守護代、庄元資が守護細川勝久に下廻上の反乱を起す(翌年、鎮定される) 上高末の八幡神社が創建されたという 下高末の諏訪神社が創建されたという このころ、横谷の洞松寺の石造宝篋印塔が作られる(これは庄元資の墓と伝えられる) このころ、里山田の長泉寺を高草石見入道が創建す 庄元資が備前松山城主、上野頼氏を攻め滅ぼし、猿掛城から松山城(高梁)に本拠を移す 矢掛の多聞寺が西三成奥迫から現在の地に移る 矢掛の瑞雲寺が僧禪庵によって創建される 猿掛合戦が行われる(毛利元就・三村家親の軍が猿掛城を攻め、庄元資の軍と城下で激戦し講和) 小田の禪源寺が創建されたという 里山田と中白江との間に水論が起る(片山家文書) このころ、現存の小田寺観音堂が建立される 小田神戶山城主小田兼清が走出薬師院へ梵鐘を寄進する 毛利元清・三村元親の軍が庄高資を松山城に攻め滅ぼす (庄高資の首は、東三成の禪応寺に葬られたという) 室町幕府の滅亡 小田の金剛寺が創建されたという 毛利元清(元就の子)が猿掛城主となり、毛利氏による備中の直接支配始まる 備中高松城水攻めで毛利輝元が猿掛城を本陣とする 毛利元清が猿掛城から東三成の茶臼山城に移る 毛利元清の長男宮崎丸が茶臼山城で病死し、洞松寺に葬られる 豊臣秀吉が島津征伐に向かう途中茶臼山城に立ち寄る 小田の小田孫兵衛が毛利輝元の命により、安芸国小田へ移封される (小田氏は七代二〇年間住んだ小田の地を去る) 毛利元清は芸州桜尾城で没す 毛利領地が矢掛地方で始まる(この年から翌年にかけて実施) 備前原の戦いの結果、毛利氏が備前中から退く 横谷の妙泉寺が花房志摩守(猿掛城の最後の城主)により創建される 小瀬新助領地(古核)が矢掛地方で実施される 徳川家康が征夷大将軍となる(江戸幕府の成立) このころ、山陽道の一里塚が作られる(東三成川原谷・矢掛東町・浅瀬屋戸の三か所に作られる) 花房志摩守領地が横谷村で実施される(元和六年まで各村で実施) 茶臼山城が廃城となる(元和一國一城令による) 石井家が胡町の現在地の一角に、初めて家屋を建てる (この年、古市から石井家など数軒が矢掛の町に移転してきたという)</p>																														

室町時代 南北朝時代 (建武) 鎌倉時代 平安時代

室町文化 (北山文化) 鎌倉文化 藤原文化 弘仁・貞観文化

四八	四〇	四二	四一	九二	八一	七一	六九	四〇	三六	三五	三三	三三	二〇五	一八〇	八五	一〇六八	九四	九五	八八	七五	七七〇
文安	永享	嘉吉	応永	明德	永徳		応安	暦応		建武	元弘		元久	治承	文治	治暦	寛平	天曆	弘仁	延暦	宝亀
五	十二	十二	十九	三	元	四	二	三	三	二	三	二	四	四	四	四	六	八	九	十三	元

道鏡が下野国に流されるところに、吉備真備もすべての官職を退く
吉備真備(八十一歳)死す
平安京に遷都する
文安備部が西国に遷遷中、小林の備部の草庵に数年逗留し、また歴遊にでて、
この年に没した

西川面の鶴江神社が正六位に任ぜられ、式内社となる基ができる
このころ、陰陽家の阿倍晴明が江良の阿倍山頂上で天文観測をしたという
菅原道真の意見により遷唐使を廃止する
小田部の部司の大領(長官)に小田豊郷が任ぜられる
宇角の八幡神社が創建されたという

このころ、小田の渡し、が大江嘉言の和歌に詠まれる
「有明の月に夜ふかく出ぬれば小田の渡りに雁ぞ鳴なる」
「やかげ」(屋影)の地名が和歌(藤原経衡の歌)に初めて詠まれる
(夏くればやかげの湖の涼しきに行きかふ人は過がてにする)

源平合戦が始まる
源頼朝が守護・地頭をおく(鎌倉幕府の事実上の成立)
庄家長が猿掛山に土塁を築く(猿掛城のはじまり)

このころ、東三成の持津寺の仏画、洞本著色愛染明王像図が作られる(二幅)
このころ、本願の常光寺の木造十一面千手観音立像が作られる
このころ、小田の小田寺の木造十一面観音立像が作られる
このころ、矢掛の観音寺の木造十一面観音立像が作られる

猿掛城の庄七郎に召に応じて新上山に至る
鎌倉幕府が滅亡する
猿掛城の庄氏、足利尊氏に呼応して建武政府に反旗を翻す
後醍醐天皇が吉野山に遷幸、足利尊氏、建武式目を制定

このころ、東三成の持津寺の木造仁王像がつくられる
小田の円融寺が創建されたという
地頭の小松秀清が小田に入部し、神戸山城を築いて居とする(その子康清と
き小田氏と改姓)

このころ、果指定の重要文化財の短刀、長谷部重重が作られる
今川貞世が鎮西探題に赴任の途中、屋敷(矢掛)に宿泊する(このころから矢
掛が宿場として発達)
歌人、正徹が小田で生まれる(一四五九年に没す)

南北朝の合一なる

このころ、西川面城之内に大豪族の住居が造られる
喜山禅師が庄氏の援助で横谷に曹洞宗の洞松寺を建立する
(洞松寺はその後、備中守護代、猿掛城主庄氏の菩提寺として栄える)

僧良辨が小林に曹洞宗の大通寺を建てて
僧知徳が羽無に曹洞宗の吉祥寺を建てて
羽無の吉備津神社が創建されたという

庄實冬が洞松寺に田地を寄進する(以後二〇年間の田地沽券、九通が洞松寺に
ある)

矢掛町史年表

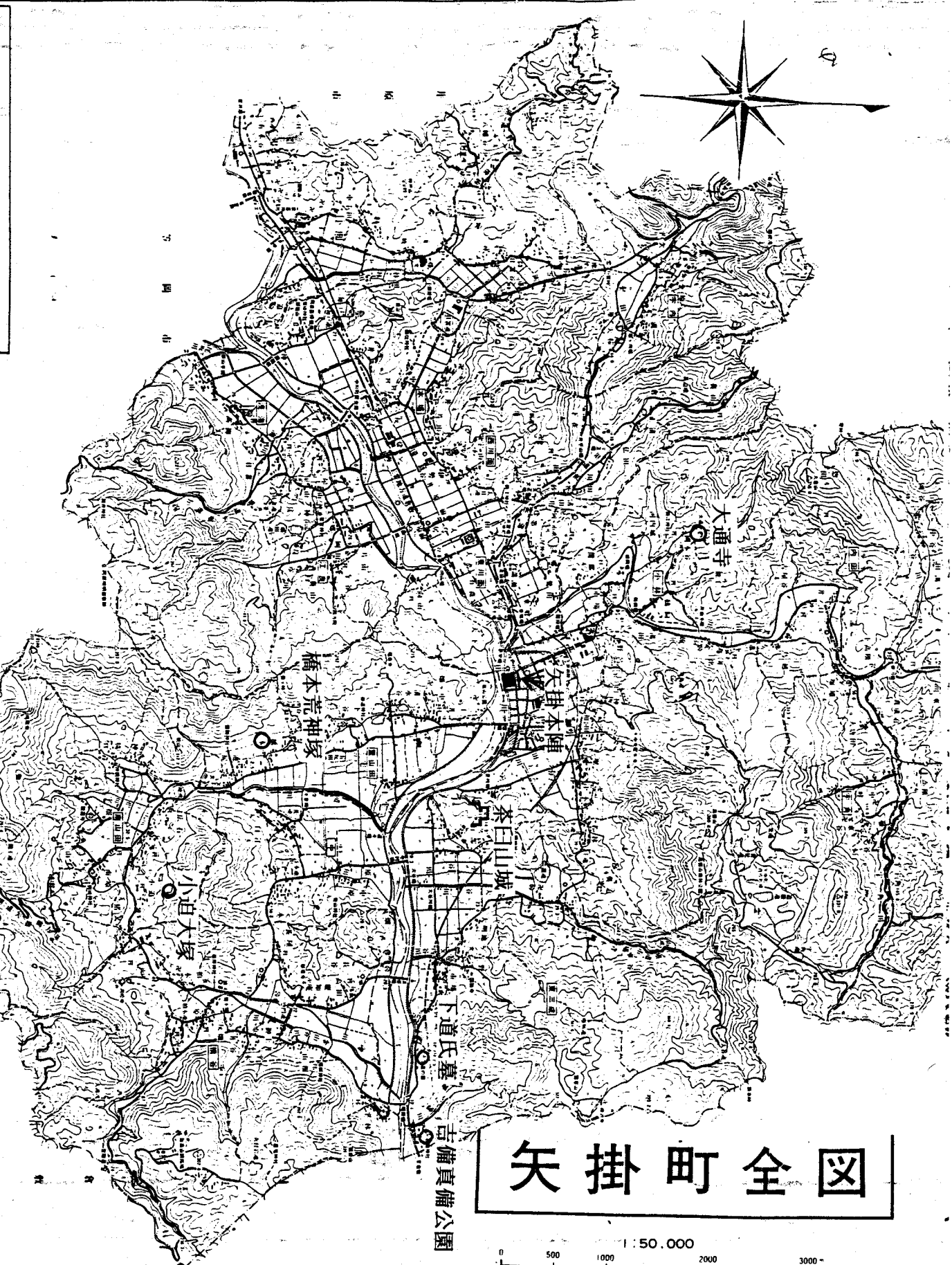
古		代		原 始 時 代			時 代 区 分
奈 良 時 代		大 和 時 代					時 代 区 分
天 平 文 化		白 鳳 文 化		飛鳥文化		古墳文化	西 年 曆
							年 代 号
六六	五二	四六	四〇	三五	一七	一〇	数万年前
天平神護二	天平勝宝四	十八	十二	七	元	三	紀元七〇〇年前
吉備真備が右大臣となる	吉備真備が遣唐副使として唐に渡る(同六年帰朝す)	東大寺大仏開眼供養が行われる	下道真備に吉備朝臣の姓が与えられた	小田原寺が建立された	下道真備が唐から帰朝する	下道真備が唐から帰朝する	縄文式土器の製作が始まる
							このころ、狩猟・漁撈の生活が行われる
							このころ、打製石槍・打製石匙などの石器が多く作られる
							このころ、笠岡の津雲貝塚ができる(二〇〇体以上の人骨が出土)
							西日本に水稲栽培が始まる
							このころ、西日本に青銅器・鉄器が広まり始める
							このころ、小林岡本谷でも磨製石斧が使用される(この石斧が出土)
							このころ、中、白江遺跡の生活跡が形成される(当時の弥生式土器・磨製石器が多数出土)
							このころ、小林僧都でも磨製石庖丁を稲刈に使用する
							このころ、中、白江の羊岡山遺跡の墳墓群造られる(墳墓のほかに多数の弥生式土器も出土)
							大和朝廷による西日本の統一が進む
							このころ、江良奥山の長谷頂上に箱式石棺がつくられる(この中から銅鏡が出土)
							吉備下道臣前津堅が天皇に叛意があったとして殺される(下道氏が失脚する)
							このころ、毎戸の小丸山古墳(円墳・壘穴式石室)が造られる
							このころ、里山の橋本荒神塚(円墳・壘穴式石室)が造られる
							このころ、南山田の小迫大塚(上円下方墳・壘穴式石室)が造られる
							聖徳太子が推古天皇の摂政となる
							このころ、西三成の奥迫古墳群などの古墳群ができる
							遣唐使始まる
							大化改新始まる(中大兄皇子ら蘇我入鹿を殺す)
							下道氏は一八色の姓一を与えられた際「朝臣」を賜り政治上復権する
							このころ、東三成の谷川内に下道氏の墓が作られる
							下道真備が下道國勝の子として生まれる
							大宝律令できる
							下道真備の祖母の遺骨が銅製骨蔵器(銅鑿)に収められ、東三成谷川内の墓地に埋葬される
							(この銅鑿を國勝寺が所蔵)
							平城京に遷都する
							このころ、古代山陽道の駅家「小田原」ができる
							下道真備(吉備真備)が留学生として入唐す
							下道真備が唐から帰朝する
							このころ、小田原寺が建立された
							下道真備に吉備朝臣の姓が与えられた
							東大寺大仏開眼供養が行われる
							吉備真備が遣唐副使として唐に渡る(同六年帰朝す)
							吉備真備が右大臣となる

で き び と

きびのまきび 吉備真備

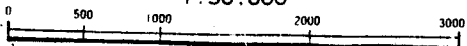
695~775(持統9~宝龜6)奈良時代の政治家、学者。出生地は、父の下道國勝は備中出身だが、母の楊貴氏は大和国宇智郡の豪族出身であるところから藤原京であったと考えられる。父祖の出身地である備中国下道郡(現吉備郡真備町周辺)との結びつきは強く、766年(天平神護2)右大臣と備中国下道郡大領を兼ねている。これより先、717年(養老元)遣唐留学生として、752年(天平勝宝4)遣唐副使として、2度にわたり入唐。唐文化の輸入につとめ、その知識を政治に反映させている。最初の遣唐留学生として派遣された時は足かけ18年間唐に滞在、帰国に際しては①儀式関係の書物(『唐礼』)②音楽書および楽器(『楽書要録』等)③曆(『大衍曆』)④武器(平射箭等)などを持ち帰朝に献上している。武器・兵学にもすぐれ、橘諸兄政権もとの軍事改革(738年の健甕廃止、739年の諸国兵士廃止)

は真備の指導によるものと考えられ、このため740年(天平12)の藤原広嗣の乱をまねいた。764年(天平宝字8)藤原仲麻呂の反乱(惠美押勝の乱)に際しても、真備の軍事指揮により、短期間のうちに反乱を鎮圧することが出来た。子孫のために書き残した『私教類聚』には、真備の思想がよくあらわれている。最高位は正二位。



矢掛町全図

1:50,000



吉備真備公園

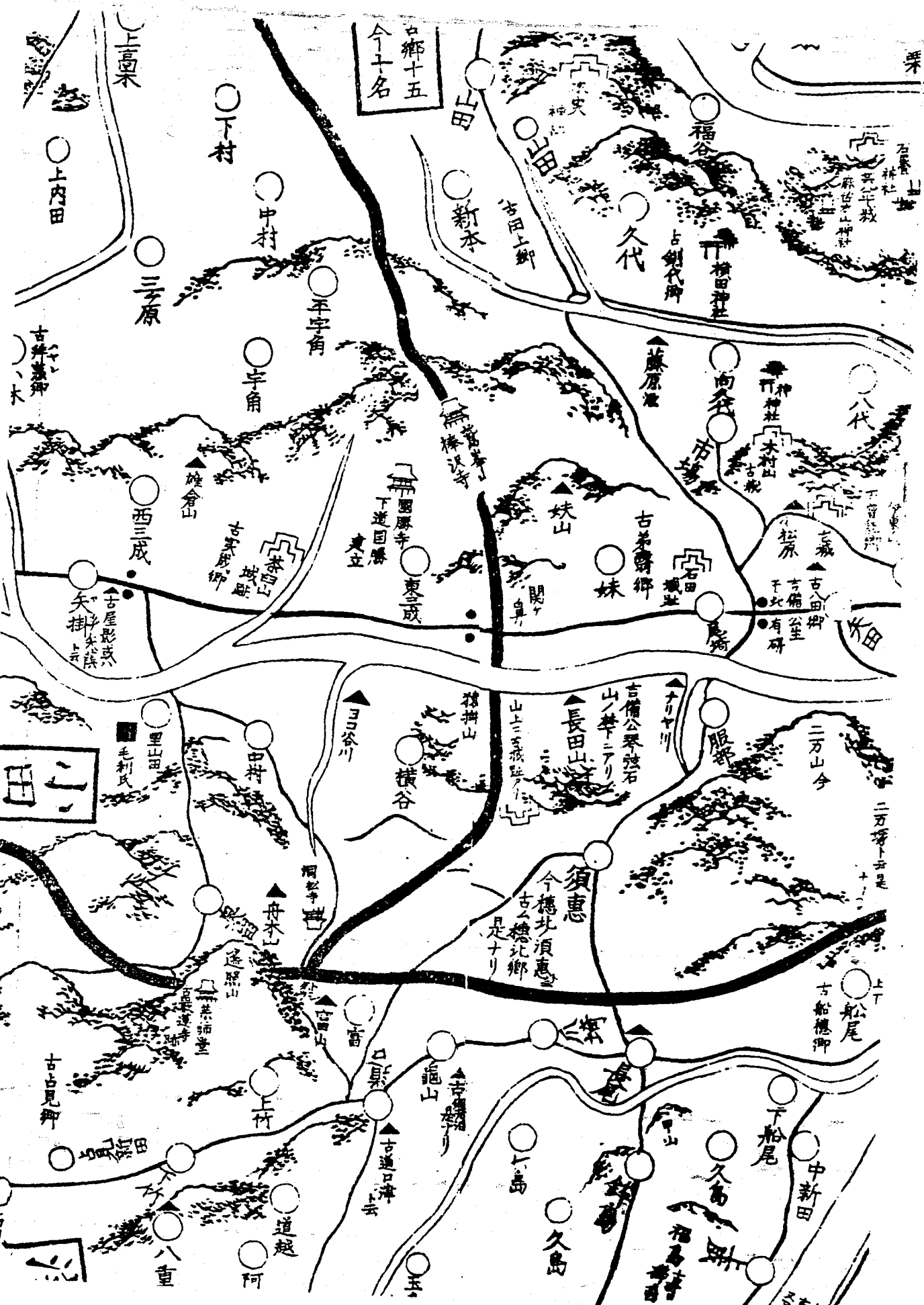
下道氏墓

本臼山城

橋本荒神塚

小迫大塚

大通寺



古郷十五
今十名

上高木

○下村

○上内田

○三原

○中村

○平字角

○宇角

○山田

○新本

○古田上郷

○福谷

○久代

○八代

○西三成

▲雄倉山

▲國原寺
下道回廊
東立

○東三成

▲妹山

○妹

古弟齋郷

○向谷

▲大村山

▲松原

▲古田郷

▲水田

○里山田

■毛利氏

○田村

▲日谷川

○横谷

▲横山

▲長田山

吉備公翠石
山ノ替ニアリ

○服部

二万山今

二万塚ト云是

○須惠
今搦北須惠
古ノ搦北郷
是ナリ

○船尾
古船徳御

古白見郷

○上村

○古道口津

○龜山

○一島

○久島

○下船尾

○中新田

○久島

○八重

○道越

○阿